



ビエンチャン郊外のジャンクショップオーナー

■ フォトエッセイ ■

ラオス・カンボジアの ベトナム人

写真・文
坂田正三
Shozo Sakata

●ベトナム人越境移動の歴史

今日ほど人の越境移動が盛んに行われている時代はないといえる。移動モードや通信技術が発達し、物理的にも心理的にも異国は近くなった。世界経済はグローバル化する一方である。世界的にみれば、所得の低い途上国の労働者が先進国や近隣のより豊かな国に出稼ぎに出るケースが越境移動の一般的な形であろう。ベトナムからも日本、韓国や中東諸国などへの出稼ぎ労働者は年々増加している。それに対してベトナム人のラオスやカンボジアへの越境移動は、少し事情が異なる。歴史的経緯も複雑で、移動の動機や背景となる経済・社会的要因も多様である。

ベトナム人のラオス・カンボジアへの本格的な越境移動の歴史は、フランス植民地時代にさかのぼる。その後、ベトナム戦争が終結すると、一四〇万人といわれる大量の難民が国外に脱出したが、「反革命分子」である彼ら難民たちとは異なり、ラオスやカンボジアへ移住した者たちは、同じく共産主義政権が成立した同盟国の経済・社会建設を担う重要な存在とみなされた。

一九八六年のドイモイ開始と一九八九年のベトナム軍のカンボジアからの撤退を機に、多くの移住者が帰国するが、漁民や都市雑業層のなかには、ラオスやカンボジアにそのまま暮らし続けることを選択したベトナム人もいた。一九九〇年代半ばのASEAN拡大に加え大メコン圏構想による国境をまたぐ広域インフラ



ビエンチャン郊外の若夫婦。子供を故郷の親に預けて出稼ぎ中



タケークのジャンクショップにて

整備が進むと、これら三カ国の経済的な結びつきはより強くなり、さらに、二〇〇〇年以降ラオスやカンボジアで経済成長が加速すると、新たな経済機会を捉えようと越境するベトナム人が増加した。

●「ベトナムには人が多すぎる」

越境ベトナム人の存在が気になり始めたのは、筆者がリサイクル産業の調査をしている時であった。ペットボトルや鉄くずなどの再生资源がカンボジアやラオスからベトナムに持ち込まれていることは、ベトナム側の調査から分かってはいた。しかし、ラオスで調査してみても驚いたのは、ラオスで再生资源を収集している人たちの多くもベトナム人ということであった。首都ビエンチャンの郊外、第二、第三の都市であるサワナケートやタケーク、そしてこれらの都市を結ぶ国道沿いにくくつもみられるジャンクショップ（再生资源の回収所）を訪れると、かなり高い確率でベトナム人の経営に会うことになる。

ラオスでジャンクショップを経営しているのは、ラオスに来て一〇年末満の比較的最近の越境者が多く、タインホア省、ゲアン省、ハティン省などベトナム中部の農村出身者である。家族を残して単身で、あるいは子供を親に預けて夫婦で移住しており、農地も残している（他の農家に賃貸している、あるいは親世代が耕している）ケースが多い。彼らは一様に、「ベトナムでは食っていけない。人が多すぎる」と越境を決意した理由を述べる。たしかにベトナムの中部地方は人口稠密で農地の生産性も低く、昔から出稼ぎに出る者が



ビエンチャンの鉄リサイクル工場。経営者も労働者たちの一部もベトナム人

多いことで知られた地域である。彼らは、貧困から抜け出す大きなチャンスを求めて、これまでのようにハノイやホーチミン市へ出稼ぎに出るのではなく、国境を渡ることを選択した者たちである。国単位の一人あたりGDPでみればベトナムはラオスより豊かであるが、ベトナム中部の農村はラオスの都市部よりずっと貧しいのである。同様に、「ベトナムで食えない」と嘆く若者

たちにタケークの長距離バスターミナルでも会った。このバスターミナルの売店はベトナム人が経営権を持っており、ほぼすべての売店にベトナム人の売り子たちがいる。親類や同郷の知り合いを頼って中部の農村から出てきた女性たちである。

もちろん、ベトナムで食えないことが移住の理由のすべてではない。より大きなビジネスチャンス求めて国境を越える者もいる。ベトナムと国境を接するカンボジアのラタナキリ州バンルンで会ったジャンクショップの経営者は、ベトナム南部ビンフック省でコシヨウのプランテーションで成功した夫婦であった。儲けたお金の再投資先として、あらゆる面で規制がとてども緩い（「トラックの積載重量上限なんてあってないようなものだよ!」）カンボジアでの再生資源収集ビジネスを選んだのだという。トラックやペトボトルの圧縮機などの設備にも投資し、バンルンで最も規模の大きなジャンクショップに成長している。

カンボジアやラオスの規制の緩さは、目端的にベトナム人に大きなビジネスチャンスをもたらす。ポンペンで訪問したベトナム人のエアコン輸入業者は、中古のエアコンを日本からカンボジアへ輸入し、電圧二二〇ボルトの仕様に修理してベトナムに送っていた。中古エアコンは国際的な貿易規制対象品であり、近年ベトナムでは輸



カンボジアからの出国手続きを待つ天然ゴム園の労働者たち



ベトナム人もラオス人もカラオケが好き



タケークの長距離バスターミナルにて



ブノンペンエアコン輸入業者

入が厳しく規制されている。しかしカンボジアの港ではまだチエックが甘く、入手したエアコンは同様にチエックの甘い陸路やメコン川水路でベトナムに送っている。また、ピエンチャン郊外の工業団地では、ベトナム人が経営する鉄リサイクル工場から、さすがにベトナムではもう滅多にお目にかかれないレベルのものすごい量の黒煙がもうもうと立ち上っていた。投資認可の際に環境アセスメントは義務付けられているものの、それ以降

さかた しょうぞう／アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ

主著に「ベトナム紅河デルタ地域の『専業村』における労働市場—農村に集積するインフォーマルセクターとその雇用—」（坂田正三編『高度経済成長下のベトナム農業・農村の発展』アジア経済研究所 2013年）等。



カンボジアで仕入れたキャッサバをベトナムのでんぶん加工工場に運ぶ

役所のチエックはないという。ベトナムのザーライ省とつながるカンボジア・リタナキリ州の国境の町オヤダオで、旧正月に故郷に帰るベトナム人の集団に出会った。天然ゴムプランテーションで働く若い労働者たちである。それまでのベトナム人の越境者たちのように、親類や知人の伝手を頼って個人で国境を越えたのではなく、彼らは、ラオスやカンボジアに投資するベトナム企業によってリクルートされ、集団で現地に送り込まれた若者たちである。彼らのような制度化された新しいタイプの越境が今後増え、ラオスとカンボジアのベトナム人はさらに多様化していくのだろう。



国境を越えて日帰りでラオスに再生資源を収集しに行く人も多い



家電製品修理業など細かい手作業を必要とする職業にはベトナム人が多い